

# 軍港都市と近代の文化遺産

——舞鶴の「赤れんが」——

上杉和央

## はじめに

軍港都市は、自らの歴史とどのように向き合ってきたのか。大きく言えば、これが本稿のテーマである。ここでは、この問題について舞鶴を事例として探ることにした。

本稿で言う軍港都市とは、戦前に海軍鎮守府のおかれた国内四都市——横須賀・呉・佐世保・舞鶴——を指している。江戸時代には一漁村にすぎなかったこれら四地区の景観は、「海軍」の本拠地（鎮守府）が置かれることで一変し、軍港を備えた都市としての景観が現出した。戦後、海軍が解体した後も、各都市は海上自衛隊の母港として利用され、さらに横須賀・佐世保には米軍基地も立地しており、近代以降、一貫して「軍港」都市としての性格を保ち続けている。

さて、先述の問題を考えるに際し、たとえば自治体史編纂による史実の掘り起こしは、地域の歴史へのまなざしの基礎を提供する重要な作業であり、またその後の地域アイデンティティの形成をある程度方向づける一例としてとらえることができるだろう。四都市のうち横須賀市では市史編纂が進行している最中であるが、二〇〇九年（平成

二二）に刊行された『新横須賀市史 別編 文化遺産<sup>①</sup>』の場合、目次構成は「第一編 近代化遺産」、「第二編 近代建築」、「第三編 近代建築」、「第四編 彫刻」、「第五編 絵画」、「第六編 金工」、「第七編 石造物」、となっている。これを見れば、どの時代、どの事象に力点を置いているかは明らかだろう。

一方、一九七三年（昭和四八）から一九九四年（平成六）に編纂・刊行された『舞鶴市史』の場合、三巻にわたる通史編のうち、中・下巻が近代に充てられ、さらに別編として「現代編」があることから、やはり近代以降への注目が強いことが分かる。舞鶴には近世城下町であった西舞鶴地区があり、中世山城も豊富にあるにもかかわらず、この偏重はやや驚くものである。ただ、文化財が掲載されている「各説編」において、文化財（第七章<sup>②</sup>）の取り上げられ方を見ると、①有形文化財、②無形文化財、③遺跡と史跡という構成であり、このいずれにおいても「近代」に作製ないし造形されたものは含まれていない。すなわち、通史的な記述においては「近代」は重視されているものの、それは「文化財」ないし「遺産」ではないとみなされていたことになる。もっとも、近代の文化遺産は一九八〇年代後半頃から各分野での保

護の機運が高まり、一九九〇年代に入って文化財保護審議会や文化庁において取り上げられ始めた、いわば新しい文化財カテゴリーの一つである。よって『舞鶴市史』編纂時にそのような枠組みでの記述がないのも、至極当然なことである。むしろ、このような新たなカテゴリー化それ自体が、「歴史との向き合い方」の歴史的な変化に他ならないのであり、そのような社会的な変化のなかで、軍港都市における歴史——ここでは近代——へのまなざしがどのように変わったのかという点に焦点を当てることが重要であろう。

よって本稿では、主に一九九〇年代以降における軍港都市の「近代の文化遺産」創出の過程に注目することにした。もちろん、そのような事象に含まれる内容は無数にあり、そのすべてを扱うことは不可能である。ここでは、赤煉瓦造建築物に関わる事象に絞る形で論を進めたい。というのも、海軍関連施設として赤煉瓦造建築物は軍港都市に共通して建造されたものであり、また現在、一部が各地域の景観上の重要な構成要素として位置づけられているからである。すなわち、赤煉瓦造建築物は歴史的景観を想起する遺産としてとらえられる側面があり、このような遺産化の過程を明らかにすることは、冒頭に掲げた大きなテーマを解明するための大きな役割を担うと考えられる。

このような軍港都市の景観における赤煉瓦造建築物の遺産化（ないし文化資源化）をめぐる問題については、すでに佐世保の事例を山本が検討している<sup>3</sup>。ここでは行政と住民組織、そして米軍といった主体によって景観の遺産化をめぐる思惑が異なりつつも、それによって起

こるせめぎ合いやある種の共犯関係が鮮やかに描き出されている。本稿では、この山本の研究もふまえつつ、佐世保以外の地域として、舞鶴を事例地に選択することにした。佐世保と異なり、舞鶴には米軍施設が存在しない。だからこそ、よりストレートな形で遺産化の過程が見えるはずである。

## 第一節 「赤れんが」の発見

現在の舞鶴市は、赤煉瓦造建築物群（以下、「赤れんが」と表記する）の「赤」と海の「青」をイメージカラーとする観光戦略を打ち出している<sup>4</sup>。注目したいのは、「赤」で代表されている「赤れんが」が景観資源として「発見」された経緯やその背景である。海軍鎮守府時代に建造された幾多の「赤れんが」、そして東舞鶴・西舞鶴それぞれの市街地の眼前に広がる海。これらの要素は戦前には揃っていたものであり、近年、突如として舞鶴市民の前に現れたのではない。しかし、「赤れんが」が舞鶴の特徴となることを舞鶴市民が「発見」し、実際に活用し始めるようになったのは、元号が平成に変わってからのことにはすぎない。その活動が二〇年余りの間に成熟し、その結果として「赤」と「青」の観光戦略が構想されたのである。その過程の端緒には、「赤れんが」を近代の文化遺産ないし近代化遺産として、まちづくりに活かそうという動きがあった。

この「赤れんが」の保存と活用を中心とした取り組みは、現在、国土交通省の進める「景観まちづくり」の先行的な模範例として取り上

げられており、また「観光まちづくり」の実践例として語られるなど、<sup>(5)</sup> 全国から注目を浴びる活動となっている。ただ、それが当初から「景観」や「観光」を意識したものであったかと言えば、そうではなかった。

そもそも、「赤れんが」を保存すべきだと最初に考えたのは、舞鶴市内の人間ではない。一九八二年（昭和五七）、日本建築学会が舞鶴市に対して「旧海軍の煉瓦造建築」の保存に対する要望書を届けており、この時点で専門家の「お墨付き」を得る形で近代建築物としての価値が評価される可能性があったのである。しかしながら、この要望書に対して、舞鶴市は何の反応も示さなかった。近代化遺産や近代の文化遺産といった言葉が社会に広がっていない中、保存すべき価値があるのは「古いモノ」であり、新しく、また見慣れた「赤れんが」を「遺産」としてとらえるための素地はなかった。

たとえば、「赤れんが」の保存をめぐる動きのなかでも最初期から注目され、後に舞鶴市政記念館となる旧舞鶴海軍兵器廠予備艦兵器庫の場合、当時は舞鶴市役所の倉庫（二階）兼印刷室・運転手控室（一階）として利用されていた。そして、聞き取りによれば、「職員もあそこ行けって言われたら嫌だなあ」、「なんかね幽霊でそうや」といった印象を持つところであった。市役所に隣接するものの、「葛がからんどうてね、どうにもならんようなもんやったんです。汚い汚いもんやし、別に歴史が分かっているわけでもないし、いつ建てられたかもわからんし、なんにも分からんですよ」、このような状態であった。また、市役所北側にあり、後に赤れんが博物館となる旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫も、やはり葛が絡まり、ガラスも割れているような有様であっ

たという。

その後、一九八四年（昭和五九）に実施された「観光拠点形成に関する調査」において京都府・舞鶴市は「赤れんが」の活用を提言しているが、この時点においても具体的な活用案などを検討するには至らなかった（表一）。

戦前、舞鶴市には数多くの海軍関連施設があった。それらの施設の中には、たとえば、戦後になって引揚者を受け入れる施設として転用されるなど、新たな利用がなされたものもあった。しかし引揚施設については、引揚業務が終わった後、ごく短期間、学校施設として利用されたことを除けば、利活用されることなく放置されていた。そして、その広大な土地は工場誘致の場となり、海軍施設・引揚施設として利用された建物は取り壊されてしまった。その取り壊しが一つの契機となって引揚記念公園の建設が進んだことは、前稿で指摘したとおりである。<sup>(8)</sup> 放置されていても、市民の目に「当たり前」の景色として映っていた間は、記憶を伝える装置として機能していた。いや、取り壊される段となって、放置された「当たり前」の景色の中に、実はそのような機能があったことをはじめて認識したのである。それは、前稿で紹介した、舞鶴から国内各地に帰還していった引揚体験者が舞鶴を再訪し、思い出の景色との違いに愕然として発した悲しみの声とは、きわめて対照的である。ある場所から離れた者は、異なる場所の経験をもってその場所の景観を相対化してとらえ、結果として意味ある風景として認識しやすいのに対し、その場所から離れずに居住し続けている者にとって、その景観は内部化・身体化されており、景観の持つ意

表1 舞鶴市の諸計画・構想と「赤れんが」

年	名称	事業主体	内容・備考
1984	観光拠点形成に関する調査	京都府・舞鶴市	「赤れんが」の活用を提案
1989	丹後リゾート構想	舞鶴市	「赤れんが」の再利用を組み込む
1993	都市景観基本計画	舞鶴市	ウォーターフロントの整備計画の一環として「赤れんが」活用をうたう
1994	北近畿地方拠点都市地域基本計画	北近畿地方拠点都市地域基本計画推進協議会	「赤れんが」活用をうたう
2001	第五次市総合計画	舞鶴市	「赤れんが」の保全と活用をうたう
2002	観光基本計画リーディングプロジェクト	舞鶴市	「赤れんが」の転活用とトレイル創出
2002	中心市街地活性化基本計画	舞鶴市	港湾回遊ゾーンとして「赤れんが」の転活用・検討をうたう
2003	舞鶴宝もの大学都市構想	近代化遺産等活用研究会	市長に提出
2004	舞鶴の智恵を活かす蔵	赤れんが倉庫保存活用研究会	市長に提出
2007	赤れんがパーク構想	舞鶴市赤れんが倉庫群保存・活用検討委員会	「舞鶴アート・スクール構想」を提言
2008	赤れんが倉庫群の活用とデザインに関する提言	赤れんがアートスクール活用・デザイン検討委員会	市長に提出

(出典) 舞鶴市提供資料より作成。

味を意識することは難しい。景観内に住まう者がその景観に眼を向けるには、何らかの「気づき」が必要である。

「赤れんが」に対する具体的な取り組みは、一九八八年（昭和六三）に発足した舞鶴市の市職員自主研究グループ「舞鶴まちづくり推進調査研究会」の「都市の個性化」分科会<sup>9)</sup>の数名が、翌一九八九年（平成元）三月に横浜市の視察を行い、横浜市の再開発事業「赤レンガパーク構想」を知ったことに始まる。舞鶴にも「赤れんが」は残されていたが、先に述べたように、市役所の倉庫であったり、もしくは放置されていたりと、「赤れんが」を活かした利用がなされているとは言えなかった。横浜での取り組みを目の当たりにしての、「舞鶴に多く残っている赤煉瓦倉庫をまちづくりに活かせるのではないか」という感想は、この時点ではまさに萌芽的なものでしかなかったが、たしかに一つの「気づき」の瞬間であった。

この年の一月二十九日には研究会のメンバーのなかから「赤レンガ建物群景観保存を考える会」というプロジェクトチームが発足し、このチームが中心となって一二月には市役所に隣接して建っていた舞鶴市所有の赤煉瓦倉庫一棟——すなわち、市役所の倉庫として利用されていたあの「汚い」倉庫——のライトアップを実施した（写真1）。聞き取りによれば<sup>10)</sup>、研究会の活動を通じて「赤れんが」が次第に話題にのぼるようになってきていた。そして、折しもリゾート法などの制定やいわゆるバブル経済のなか、各地でイルミネーションやライトアップ事業がなされており、そのような状況を見ていた一人が「赤れんがをライトアップしてみたい」と思いついたことがきっかけであっ





写真1 1989年の赤煉瓦倉庫のライトアップ時の状況 提供：NPO 法人赤煉瓦倶楽部舞鶴

たという。

工事現場等で利用する投光機を使った手作りのライトアップでは、「楽しくないと」という思いのもと、恭しく点灯式も行った。市役所本庁舎の玄関前に特設のスイッチを設け、スイッチを押すとライトアップが始まる仕掛けであるが、投光機のスイッチは機械にしかついていない。携帯電話が普及していなかった当時、メンバーは小型無線を持って点灯式会場と投光機そばに待機。会場での「儀式」のタイミングに合わせて投光機側のメンバーに無線で合図を送り、合図を受けたメンバーは素早く機械のスイッチを手動でオンに。斯くも奇抜で洒落た記念的演出は見事な成功をおさめたという。

この点灯式を皮切りとするライトアップが、市民の「赤れんが」に対する意識にどれほどの影響を与えたのか、その内実は不明である。実際、当時を振り返った記録には、市役所等への問い合わせがほとんどなく、「残念なことだが、市民の反応は分からなかったというのが正直な話だ」と記されている<sup>(12)</sup>。ただ、聞き取りにおいては、市民の評価は想像よりも良かったということである。また、舞鶴市の行政や市民が海軍に関連するモノ（有形・無形を問わず）に着目し始めたのがいつごろかを尋ねた際の、ある一人による「やっぱりこのライトアップじゃない。正にれんがに光を当てたつてのはライトアップじゃないかと（思う）」という応答はきわめて示唆的である。この意見に依るならば、「赤れんが」を保存、活用するための具体的な活動の端緒であったライトアップは、実際的にも、そして象徴的にも、暗闇から「赤れんが」を浮かび上がらせる役割を果たした。恭しい式典によって点灯

し始めた投光機の灯りが照らし出したのは、それまでの「汚い」倉庫ではなく、歴史的な遺産としての「光」をまとった「赤れんが」であった、ということになるだろうか。

## 第二節 「赤れんが」の文化財化

この時点で、ライトアップの演出を行ったメンバーは「赤れんが」がどのような歴史を持っているのかといった基本的な歴史すら把握していなかった。また舞鶴にどれくらい「赤れんが」が残されているのかといった点も不明であった。そのため次に取り組むべき具体的な課題は、このような基本的調査をもとにした「赤れんが」の価値づけ作業であることが浮かび上がってきた。そこで、一九九〇年（平成二）四月に「まいづる建築探偵団」を発足、市内各地の赤れんが建築物が調査された。その結果、夏には市内北西端部に位置する神崎地区でドイツ人ホフマンが考案した輪環式の煉瓦造り窯を「発見」するにいたった。このホフマン式輪窯は国内に数基しか現存しない貴重なものであり、舞鶴の「赤れんが」の価値を宣伝する施設としても適当かつ効果的であった。

市街地から離れていたとはいえ、ホフマン式輪窯の煙突は、舞鶴と宮津を結ぶ鉄道（現・北近畿タンゴ鉄道・KTR）から望むことができる。ただ、それまでは「煙突があるというのでも、KTRには乗ってただけでも全然気がつかんかったんですね。風景の中にも映ってこなかった、目に入ってこなかった」という状況であった<sup>(4)</sup>。それが、専門家の意見を

聞きつつ、歴史的ないし建築的価値を調べるなかで、神崎地区の近代においてホフマン式輪窯を用いた窯業が生業としてきわめて重要であったことが明らかにされていく。そして、そこで生産された煉瓦の一部が海軍施設に供給されるといった広がりある歴史がひも解かれていくことになったのである。それまで「目に入ってこなかった」ホフマン式輪窯は、神崎地区ないし軍港都市舞鶴の歴史を語るになくてはならない存在へと大きく変化した。その結果、一九九九年（平成一一）には、国登録文化財に登録されるまでになる。

文化財という点で見れば、旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫が一九九一年（平成三）一二月に舞鶴市の指定文化財に指定されており、これが舞鶴市における近代の文化遺産の文化財指定の端緒である（表2）。当初、舞鶴市はこの倉庫を取り壊して、土地の新たな利用を計画していた。これまで「赤れんが」の調査活動してきた主たるメンバーは舞鶴市民という立場の市職員であり、市側の計画を察知することが容易な状況にあった。すばやくその事情を察知した「市民」は、放置されていた倉庫の掃除をして他の市民にも「赤れんが」の存在をアピールし、保存の機運を高める運動を始めた。その結果、市側が解体前の記録調査を実施することになり、現存最古級の鉄骨煉瓦造の構造を持つ建築で、歴史的・構造的に貴重であることが判明した。これにより、市側は方針を一転させ、保存活用へと動き出すことになったのである。その後、この倉庫は「赤れんが博物館」として活用、一九九三年（平成五）に開館し、現在にいたっている（写真2）。

旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫が近代の文化遺産として初めて文化財



表2 舞鶴の「赤れんが」関連施設の遺産認定と表彰の動向

名称	年	文化財	表彰・認定（表彰・認定団体名）
旧海軍兵器廠魚形水雷庫	1991	市・指定文化財に指定	
赤れんが博物館	1997		第6回BELCA賞 (公益社団法人 ロングライフ ビル推進協会)
神崎ホフマン輪窯	1999	国・登録文化財に登録	
桂貯水池堰堤	2001	府・指定文化財に指定	
北吸隧道・舞鶴市政記念館	2002	国・登録文化財に登録	
赤煉瓦みなと地区	2003		美しいまちなみ大賞 (国土交通省)
舞鶴旧鎮守府水道施設	2003	国・重要文化財に指定	
赤れんが倉庫群・旧海軍工廠造 船工場・神崎ホフマン窯など	2007		近代化産業遺産認定 (経済産業省)
赤れんが倉庫群（7棟）	2008	国・重要文化財に指定	

(出典) 舞鶴市提供資料より作成。



写真2 赤れんが博物館 提供：舞鶴市立赤れんが博物館

指定された前年には、先に触れたように、ホフマン式輪窯が「発見」され、広く広報、宣伝がなされていた。また一月に「第一回赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」が開催され、舞鶴市内外から多くの参加者を得るなど、一般市民の「赤れんが」への認知が高まっていた。そして、文化財指定がなされた半年前の一九九一年（平成三）六月には舞鶴市民の「赤れんが」への関心を集約する組織として「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が市民二〇〇名によって結成された。さらに同八月には日本を代表するジャズピアニスト山下洋輔のバンドを迎えた「赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴'91」が、同十一月にはJ. J. ジョンソンやトミー・フランガンといった世界的に著名なジャズ奏者のバンドを迎えた「赤煉瓦オータム・ジャズ・イン舞鶴'91」が開催され、全国各地から集まった観客がジャズの響きと共に舞鶴の赤れんがイメージを舞鶴土産として持ち帰った<sup>15)</sup>。

このような動向をみれば、一九九一年（平成三）一二月に文化財指定がなされた背景として、実際に保存を求めて運動を起こした者のみならず、その周辺においても「赤れんが」への意識が高まっていたことが後押しになっていたことは疑いない。そして、市幹部が赤煉瓦シンポジウムやジャズ・フェスティバルなどの成功を目の当たりにして、「赤れんが」の資源性を肌で感じていたことも一定の効果があっただろう。第一回赤煉瓦シンポジウムin舞鶴の来賓あいさつにおいて町井正登市長（当時）は、次のような趣旨の言葉を述べている。

これまで赤煉瓦の建物は市の発展に邪魔な物と思ってきたが、こ

の考えは間違っていた。こんなに多くの街からレンガを訪ねてやってきてくれるということは、これは貴重な財産なのかも知れないと、初めて知りました。今後は、赤煉瓦を街の活性化に役立てて行きたい<sup>16)</sup>。

また、旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫が「赤れんが博物館」として生まれ変わった一九九三年（平成五）は、西舞鶴（旧・舞鶴市）と東舞鶴（旧・東舞鶴市）が合併した一九四三年（昭和一八）から五〇年に当たっており、「赤れんが博物館」は五〇周年の記念事業としての側面も担った。その翌年には市役所倉庫として利用されていた旧舞鶴海軍兵器廠予備艦兵器庫が「舞鶴市政記念館」としてオープンしたが、これもまさに「市政記念」という事業のなかに位置づけられていた。また、一九九三年（平成五）に発表された舞鶴市の都市景観基本計画におけるウォーターフロント整備計画の一環として赤煉瓦倉庫群の活用がうたわれ、また翌年に発表された北近畿地方拠点都市地域基本計画においても赤煉瓦倉庫群の活用が示されるなど、この時期になると、行政の中長期の展望・計画のなかにも「赤れんが」が登場するようになる。一九九五年（平成七）からは、舞鶴市主催の「赤れんがフェスタ」と銘打ったイベントが開催されるようになり、「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」によって開催される「赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴」とともに、「赤れんが」を活用・PRする事業として定着して行くことになる。一九九〇年代前半が赤れんが博物館と市政記念館という形での「赤れんが」保存——いわばハード面での整備——が中心軸にあったとする



ならば、一九九〇年代後半は、このようなソフト面での事業による「赤れんが」イメージの流布と展開がより前面に現れた時期であったと位置づけられる。「赤れんが」は「当たり前」の光景ではなく、歴史的な遺産であり、「当たり前ではない」光景であることがより積極的に市内外に宣伝されていったのである。

二〇〇〇年代以降も引き続き「赤れんが」をめぐる活発な展開がなされたが、一九九〇年代とは異なり、行政が「赤れんが」をより積極的に利用するようになってきている。とりわけ、遺産としての保存や長期的活用方針といった大きな枠組みに関わる点においては、行政が主導する形で進められるようになった。それは二〇〇一年（平成一三）に策定された舞鶴市の第五次総合計画<sup>18</sup>において「赤れんが」の保全・活用が位置づけられたことにも現れている。

二〇〇〇年代の大きな動きの一つに、赤れんが博物館、舞鶴市政記念館につづく三つめの「赤れんが」活用事例として、二〇〇七年（平成一九）の「まいづる智恵蔵」開館がある。これは二〇〇四年（平成一六）に民間倉庫会社が所有していた赤煉瓦倉庫（旧舞鶴海軍兵器廠弾丸庫並小銃庫）を市に無償譲渡したことに始まる。この倉庫は舞鶴市政記念館の西隣であり、その活用をめぐる市は有識者と市民からなる「赤れんが倉庫保存活用研究会」を設置して、検討を求めた。その研究会から「舞鶴の智恵を活かす蔵」としての活用が答申され、それに基づく整備がなされた結果、二〇〇七年（平成一九）の開館となったのである。そして、指定管理者制度による運営を行い、指定管理者には、二〇〇〇年（平成一二）に特定非営利活動法人（NPO）となっ

た「赤煉瓦倶楽部舞鶴」（旧赤煉瓦倶楽部・舞鶴）がついている。「赤煉瓦倶楽部舞鶴」は、それ以前、二〇〇五年（平成一七）に舞鶴市政記念館の指定管理者にもなっており、「赤れんが」の活用や施設の運営面で主な活動をしている。このほか、二〇〇三（平成一五）には「赤れんが博物館」に赤れんが博物館友の会が設置され、また「まいづる智恵蔵」にも二〇〇八年（平成二〇）にまいづる智恵蔵サポーターがつくられるなど、より多くの市民が「赤れんが」と関わりを持つことができるような仕組みが作られている。

そして、もう一つの大きな動きが「点」から「面」への拡大である。それまでは、個別の赤煉瓦倉庫についての保存と活用が主な取り組みであり、「赤れんが」相互の関連性をもたせた活用や、赤煉瓦倉庫群を含めた景観全体を見据えた展望については、深く議論されてこなかった。このような言わば個別的で「点」的な視角からのアプローチが主たるものであった状況に対し、二〇〇〇年代に入ると、市の総合計画に位置づけられたこともあり、「赤れんが」が集中する市役所周辺（北吸地区）を総合的——「面的——にとらえたうえでの保存と活用の議論が数多く生まれるようになった。たとえば、二〇〇二年（平成一四）には、観光基本計画において「赤れんが倉庫群の転活用」や「赤れんが建造物トレイル」の創出を含む「赤れんがアーバンウォーターフロント」が計画され、<sup>19</sup> 中心市街地活性化基本計画において「港湾回遊ゾーン」の設定とその中における「赤れんが」の活用がうたわれている。<sup>20</sup> また、翌年には近代化遺産等活用研究会が設置され、その報告書のなかで「プロムナードや水辺空間の利用など景観を生かした

文化ゾーンの整備」を含む「赤れんが活用まちづくり構想」が提案されている。<sup>21)</sup>

そして、二〇〇七年（平成一九）、舞鶴市は「赤れんがパーク」構想の具体化のため、赤煉瓦倉庫群一帯について「これまで余り検討されてこなかった景観デザインを念頭に」<sup>22)</sup> おいた保存、活用を検討する委員会「舞鶴赤れんが倉庫群保存・活用検討委員会」を発足させた。この委員会は準備会を含めて五回開催され、『舞鶴赤れんがアートスクール構想——赤れんがと海を楽しむ空間の再生・創造——』と題された報告書が二〇〇八年（平成二〇）二月に作成されている。<sup>23)</sup> このなかで、ハード面の整備として、北吸地区のみならず自衛隊や民間造船所が位置する余部地区から東舞鶴市街地前面の浜地区までの広域を視野に入れた「舞鶴イーストハーバー構想」が提言されており（図一）、そのうち「北吸赤れんがヤード」および「北吸赤れんがワーフ」についての環境整備が第一期の整備として取り上げられている。<sup>24)</sup> さらに、この提言を受ける形で、二〇〇八年度（平成二〇）には「舞鶴東港周辺のアーバンデザイン及び赤れんが倉庫群の具体的な活用方策について検討する」<sup>25)</sup> ための「赤れんがアートスクール活用・デザイン検討委員会」が設置され、二〇〇九年（平成二一）三月に報告書『赤れんが倉庫群の活用とデザインに関する提言』<sup>26)</sup> が出され、参考資料として北吸地域の整備プランの具体的な平面図も提示されるに至っている。<sup>27)</sup>

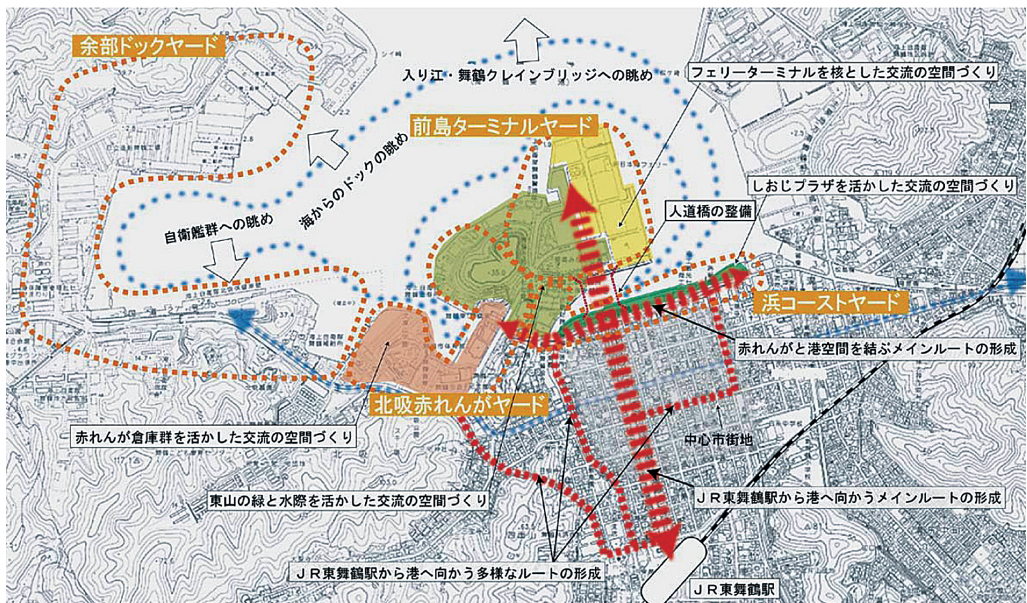


図1 舞鶴イーストハーバー構想

（出典） 舞鶴市赤れんが倉庫群保存・活用検討委員会編『舞鶴赤れんがアートスクール構想——赤れんがと海を楽しむ空間の再生・創造——』（舞鶴市赤れんが倉庫群保存・活用検討委員会 報告書）2008、18頁。

### 第三節 「赤れんが」の認識

「赤れんが」の遺産化は、新たな景観イメージを生み出すこととなった。それは、「灰色の街から赤煉瓦の街へ」<sup>(28)</sup>といった形で語られる。灰色とは、「舞鶴まちづくり推進調査研究会」が「赤れんが」に注目する前に行った市民アンケートから得られた、舞鶴市のイメージであった。そこでは「気候が悪い・町に活気がない・若者が少ない・引揚の町・岸壁の母・まちの色は灰色など、マイナスイメージのものが多数」<sup>(29)</sup>を占めた。このような結果として浮かび上がった「灰色」は、「気候が悪い」という意見があったことをみれば、一つには曇天や雪の日が多いという日本海側に見られる冬の天候の特徴から連想された色なのであろう。

ただ、市民アンケートを実施した研究会メンバーは、「灰色」をそのような実際の色としてではなく、むしろより象徴的な色として受け取った。

引揚げ時の市民あげでの温かい献身的な援護とは裏腹に、特にシベリアでの悲惨な抑留生活が長い年月となり、最後の引揚げの玄関口の港としての印象が舞鶴という街に定着してきた。引揚げが比較的早く終了した南方から引揚者を受け入れた引揚港とは異なり、悲惨な体験を市民が共有することとなったのである。そのため、市民アンケートでも、「引揚げの街」「暗い」「雨がが多い」など、マイナスイメージが先行していた。<sup>(30)</sup>

このように、それまでの舞鶴市民の持つ市のイメージがマイナスである理由を、引揚港としての記憶に結びつけたのであり、「悲惨な体験を市民が共有」したことに求めたのである。そして、このようなイメージを変えたいといった活動が始まり、「赤れんが」を発見することになるわけだが、「赤れんが」をめぐる先述の一連の活動における市民の間への浸透とその理由を、次のように分析している。

当初、市民の意識に根強く潜んでいた、暗い、灰色の街というマイナスイメージから、ほんの八年間の活動を通して、赤煉瓦の街のプラスイメージへの転換が少しずつすすんできている。<sup>(31)</sup>

きっと、市民は、「引揚げの街」という暗いイメージから脱却し、温かいイメージの「赤煉瓦の街」への変貌を待ち望んでいたのではないだろうか。<sup>(32)</sup>

「引揚げの街」暗いイメージから「赤煉瓦の街」温かいイメージへの転換を象徴するものとして、「灰色」と「赤色（赤煉瓦色）」とは効果的に利用された。別の個所で、「灰色の街から赤煉瓦の街へ」という形容は、「引揚げの街」から「赤煉瓦の街」へ<sup>(33)</sup>とも表現されており、「灰色」と「引揚げ」は置換可能な単語として理解されている。何らかの運動ないし行動の説明に際して、その前後を対比的イメージで語ることは一般的な範疇に入る手法であり、「引揚げの街」から「赤



煉瓦の街」へという言説も、何も特別なものではない。しかし、そこにプラス・マイナスといった感情的なイメージが付与されていることには、やはり注目しておかねばならない。なかでも確認しておかねばならないのは、舞鶴市民——少なくとも、「赤れんが」保存に取り組んだ市民——のなかでは、赤煉瓦が「温かいイメージ」であり、引揚げとは正反対の位置づけにあると認識されていた点である。この認識のなかに、「赤れんが」が海軍関連施設であり、近代の帝国主義日本と密接に関わる施設であったことへの意識を読み取ることはできない。「赤煉瓦の街」の成立を考えれば、それは「温かいイメージ」に必ずしも直結するものではなく、また、引揚げと正反対の位置にあるというよりも、むしろ同種の方向性を持った存在であるととらえることも十分に可能であるが、ここではそうはならなかったのである。

また同時に、この「温かいイメージ」は海軍を礼賛するものでもない。というのも、このイメージの起源は、歴史評価によるものではなく、当時、先行的に赤煉瓦造建築物を街づくりに活用していた事例によって創出されてきていたイメージ、すなわち現在性をふまえたものだからである。

全国的には、機能性の問題から全国各地でレンガの建造物を取り壊されてきており、数少ないレンガ建造物の歴史的価値が見直され始めているとともに、レンガの持つ暖かみのある輝きとレンガの建物というロマンチックな雰囲気が目玉され、各地でレンガ倉庫などの保存・活用の動きが巻き起こっている（横浜のレンガ倉

庫のライトアップ、金沢の歴史博物館、姫路の美術館など、その他東京駅や大阪の中之島公会堂もレンガの建物<sup>34</sup>）。

これは、「赤れんが」のライトアップを最初に行った際のプロジェクトチーム「赤レンガ建物群景観保存を考える会」が、発足時に作成した趣意書の一部である。ここには、赤煉瓦が「暖かみのある輝き」と「ロマンチックな雰囲気」を有していると明言されている。この趣意書の別の個所には舞鶴の「赤れんが」が海軍に由来することも触れられており、その事実が抹消される形でライトアップが始まったわけではない。しかし、先に見たように、ある程度活動が進展した後においても「赤煉瓦＝温かさ」という結びつきを強調していたことを見れば、このときにライトアップしようとしたのは、舞鶴の歴史を体現する「赤れんが」というよりも、「暖かみ」や「ロマンチック」という全国的なイメージに依拠した「赤れんが」であったことになる。その後、赤れんが博物館やジャズ・フェスティバルといった個性を獲得、発揮することで、舞鶴は確かに「赤煉瓦の街」として認知され、また成長していったが、その過程においても舞鶴の「軍港都市」という歴史的個性を最前面に出ることは稀であり、暖かみやロマンチックといったイメージがさかんに利用されていた。

念のために確認しておく、「まいつる建築探偵団」が「赤れんが」の歴史的・建築的調査を目的として結成され、実際にきわめて詳細な調査を行ったこと、また文化財の登録や指定に際して、舞鶴市によってその歴史的価値が検討されたことは言うまでもない。ただ、先に引



用した文章からも分かるように、「赤れんが」に注目するようになった当初においても、また歴史についての調査が十分なされた後においても、一貫して「赤れんが」は「暖かい／温かい」プラスイメージで語られることになる。「灰色の街」と「引揚げの街」が置換可能なものとして結びついていたのに対し、「赤煉瓦の街」と「海軍の街」（ないし「軍港都市」とは、置換されうるものとして位置づけられなかった）のである。

この不等価性の理由を実証的にとらえることは困難である。ただ、海軍についての見解ないしイメージとなれば、多種多様な意見が存在し、それを一つにまとめることができないことは容易に想像がつく。<sup>36</sup>そのような収斂しえない「海軍の街」という歴史イメージの利用を回避しつつ、徹底的に建造物という「もの」にこだわり、そして全国的動向を背景に没個性的（没地域的）なイメージでもって「赤れんが」イメージを創りあげていったことが、多くの市民の賛同を得ながら「赤れんが」をめぐるまちづくりが展開していった要因の一つであったのかもしれない。

## おわりに

以上、舞鶴における「赤れんが」の遺産化の過程とそこにある「赤れんが」への認識について検討を試みた。最後に、改めてまとめておきたい。

舞鶴において、「赤れんが」が「発見」されたのは一九八〇年代末

のことであった。そしてそれは都市整備ではなく、赤煉瓦建造建築物の保存と活用という側面として立ち現れた。この保存、活用をめぐる動きは市職員の自主的グループによって始まり、その後、市民も含めた組織となって積極的な活動がなされていった。時には行政の方針と対立する形で活動が展開されており、そこに緊張関係があったことは確かである。ただし、舞鶴の場合、市民と行政を完全な対立項と置くことはできない。それは、「官民一体となった保存活動」<sup>36</sup>が折々でうまく調整されていったからである。たとえば、佐世保市では赤煉瓦建造建築物をめぐる、市民や行政、そして米軍との間にきわめて複雑な関係があることが確認されているが、舞鶴の場合は行政と市民が「赤れんが」をめぐる「何とかうまくやっていく」という関係であった。

複数の主体が関わる事象について、主体間の対立関係のみではなく、時に協調関係や共犯関係も確認される場合、その事象は「コンタクト・ゾーン」の一側面と評することができる。「コンタクト・ゾーン」の概念は、プラットが一九九二年にその著書『帝国のまなざし』<sup>37</sup>で使用したのがその始まりで、ここでは「異なる文化が、しばしば支配と従属というきわめて非対称な関係において、互いに出会い、衝突し、格闘する社会空間」（四頁）として説明されている。プラットは主に植民地宗主国と非ヨーロッパ（在地）との相互交渉的な接触を概念化するために利用しているが、重要なのは、非対称な関係を非対象の位置づけのままとらえようとするのではなく、どちらの側も同じ歴史の軌跡に参加する者として捉えることの重要性が説かれた点である。この概念については、たとえばヨウが一九世紀後半のシンガポールの社

会空間を議論する際により詳細に議論しており、また近年では植民地や帝国主義といった文脈を離れた事象においても「コンタクト・ゾーン」がいたるところに存在することが議論され、論集の刊行にまで及んでいる。<sup>(40)</sup> さらに拙稿においても戦後沖繩の戦没者慰霊をめぐる空間を「コンタクト・ゾーン」として論じている。<sup>(41)</sup> いずれにおいても、支配―被支配ないし上下といった非対象の社会関係によって生産される空間が、実は支配と抵抗といった一面的ないし単線的な関係だけではなく、協調関係や共犯関係なども複雑に絡まるなかで生じていることに焦点を当てたものである。本稿で論じた舞鶴の「赤れんが」については、市役所側と市民という構図でありながら、市民の一部は市役所職員であること、また市役所側も市民の声を道具としつつ政策をすすめていったことなどをみれば、協調関係、共犯関係の強い「コンタクト・ゾーン」の一つとして評価できるだろう。

また、舞鶴では「暖かみ／温かみ」や「ロマンチック」という赤煉瓦に対する全国的なイメージを利用して「赤れんが」の保存、活用が進められており、必ずしも戦前の歴史へのまなざしに深く関わるような方向で進められてきたわけではないということが浮かび上がった。

近年構想されている東舞鶴港の再整備計画のなかでは、赤煉瓦造建築物の立ち並んだ近代の景観が整備の基層に位置づけられており、その意味で軍港都市の景観の連続性は意識されており、また実際に近代に建造された建築物が今なお残されているという点において連続性が保たれている。ただ、実際の保存や活用、整備といった局面には、戦前、戦後では大きな断絶があるのであり、そのような連続性と断絶性のなか

で生み出されてきたのが、「赤れんが」という遺産によって彩られた現在の都市景観であり都市イメージであると言えるだろう。

二〇〇五年には景観法が制定され、全国的にその地域の個性に合わせた景観づくりが始まっている。舞鶴は現時点では景観行政団体には移行しておらず、景観法にのっとった都市作りは目指していないが、景観を意識した整備がなされていること、そしてそこに軍港都市という記憶を活用しようとしていることは疑いない。今後、舞鶴の景観がどのように変化し、そこに歴史意識や遺産がどのように利用されているのかについて、折を見て眺めていくことにしたい。

(付記) 本稿作成に際し、舞鶴市企画管理部企画室地域振興課課長矢谷明也様、同課織田裕志様、同市福祉部地域福祉推進課課長森口清滋様、同市教育委員会教育振興部生涯学習室社会教育課長吉岡博之様には、お忙しい中、私の稚拙な疑問に丁寧にお答えいただき、貴重な情報を提供いただいた(肩書はヒアリング時点)。末尾ながら、心からお礼申し上げます。なお、本研究の一部については、「財団法人 三菱財団」による平成二二年度助成金を使用した成果であり、また、日本地理学会二〇一一年秋季学術大会において発表した。

#### 注

- (1) 横須賀市史編さん委員会編『新横須賀市史 別編 文化遺産』(横須賀市、二〇〇九年)。
- (2) 舞鶴市史編さん委員会編『舞鶴市史 各節編』(舞鶴市役所、一九七五年)、三九一―四六四頁。
- (3) 山本理佳「佐世保市における軍港景観の文化資源化」(国立歴史民俗

- 博物館研究報告」一五六、二〇一〇）、七二―九六頁。また、本書第十章の山本論文も参照のこと。
- (4) この観光戦略については、筒井による報告がある。筒井一伸「海軍・海上自衛隊」と舞鶴の地域ブランド戦略」（坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』清文堂、二〇一〇）、三九〇―三九四頁。
- (5) 国土交通省ウェブサイト内「景観まちづくり教育」ページにPDFにて掲載される『市民のための景観まちづくり読本』において、「かつてのまちを支えた施設を現在のまちに再生する」事例の一つに舞鶴市の赤れんがを活かしたまちづくりが掲載されている。http://www.mlit.go.jp/crd/landscape/gakushu/index.htm（二〇一一年四月一日検索）
- (6) 馬場英男「赤煉瓦倉庫の多様な再生活用で街のイメージを一新」舞鶴〜」（西村幸夫編『観光まちづくり―まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、二〇〇九）、一八一―一九〇頁。
- (7) 二〇一一年（平成二三）二月二二日、および四月二二日に舞鶴市役所にて実施した舞鶴市職員への聞き取りによる。
- (8) 拙稿「『引揚のまち』の記憶」（坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』清文堂、二〇一〇）、二五五―二九二頁。
- (9) この研究会には「都市景観」・「都市防災」・「都市の個性化」・「リゾート」・「地区計画」・「まちの活性化」・「文化」・「ミュージック」という八つの分科会が作られている。市役所の業務外の研究会であり、「昼間」の担当部局を越えての意見交換がなされていた。確かに「赤れんが」を活用した動きが始まったことは、この研究会の成果であろうが、さらに言うならば、市役所内の人間が立場を越えて襟を開いて話し合えたことが最大の成果であったのではないか。実際、その後の「昼間」の勤務において、課を横断するような事案の処理や計画がきわめてしやすくなったという。「赤れんが」に関する諸取り組みがある程度成功したのも、このような役所内の地盤作りが基礎にあったからであろう。
- (10) 前掲6、馬場論文、一八三頁。
- (11) 前掲7。
- (12) 馬場英男・村田正俊「赤れんが博物館誕生【舞鶴物語】」（馬場英男他編『赤煉瓦ネットワーク【舞鶴・横浜】物語』公職研、二〇〇〇）、二九頁。
- (13) 前掲7。
- (14) 前掲7。
- (15) 赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴にあわせて、「まいづる建築探偵団」が『舞鶴の赤れんが』という小冊子を作製し、会場で販売した。またこの頃には赤れんがをモチーフとした土産物が地元商店主によって作られるようになった。土産物を作った者たちは、いずれも「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」のメンバーであったという。
- (16) 前掲12、馬場・村田論文、四二頁。同時期には、市の方針として旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫が解体されようとしていたが、それが活用へと方針転換されたのも、この文章にみるような意識の変化が影響していたと考えられる。
- (17) 二〇〇八年度からは「赤れんがアート&クラフトフェスタ」となった。
- (18) 舞鶴市企画管理部企画政策室企画調整課「新しい舞鶴市総合計画二〇〇一―二〇一〇―世界にはばたく『交流ネットワーク都市』」舞鶴市、二〇〇二、七七―八二頁。
- (19) 舞鶴市経済部商工観光課編『舞鶴市観光基本計画（二〇〇二―二〇一〇）―舞鶴・港町浪漫』舞鶴市、二〇〇二、五七―七四頁。
- (20) 舞鶴市建設部都市計画課編『舞鶴市中心市街地活性化基本計画―一都二彩 一つの舞鶴に二つの彩りあるまちをつくらう―』舞鶴市建設部都市計画課、二〇〇二、四六―五九頁。
- (21) 本報告書は舞鶴市ウェブサイト内、企画管理部地域振興課のページで閲覧が可能である。http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kakaku/index.php?content\_id=30（二〇一一年五月一日閲覧）
- (22) 前掲6、馬場論文、一八九頁。
- (23) 本報告書は舞鶴市ウェブサイト内、企画管理部地域振興課のページで閲覧が可能である。http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kakaku/index.php?content\_id=30（二〇一一年五月一日閲覧）

- (24) ソフト面では「赤れんが」の活用として「舞鶴赤れんがアートスクール構想」が提言されている。
- (25) 「赤れんがアートスクール活用・デザイン検討委員会について」(第一回赤れんがアートスクール活用・デザイン検討委員会、配布資料)。本資料は舞鶴市ウェブサイト内、企画管理部地域振興課のページで閲覧が可能である。 [http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kikakup/index.php?content\\_id=30](http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kikakup/index.php?content_id=30) (二〇一一年五月一日閲覧)
- (26) 本報告書および参考資料は舞鶴市ウェブサイト内、企画管理部地域振興課のページで閲覧が可能である。 [http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kikakup/index.php?content\\_id=30](http://www.city.maizuru.kyoto.jp/modules/kikakup/index.php?content_id=30) (二〇一一年五月一日閲覧)
- (27) なお、これらの提言を受ける形で舞鶴市は「赤れんがパーク」事業の一環として計画した「まいづる智恵蔵」と西隣の赤煉瓦倉庫(六号倉庫)を渡り廊下で結ぶ計画したが、「景観を損ねる」という市民や映画関係者の反対の声があがり、市は二〇一一年に中止を決定した。この事件を評価するには、今後の整備がどのように進められるかを観察することが必要であり、時期尚早である。ただ、赤煉瓦倉庫という建物ではなく、その周辺も含めた景観全体を「遺産」としてとらえる動きがあることを示す端的な事例であることは間違いない。経緯については、下記の新聞記事に詳しい。『朝日新聞』(京都市内版)、二〇一〇年一〇月七日朝刊、二五頁。『朝日新聞』(丹後版)、二〇一一年一月二五日朝刊、二七頁。京都新聞ウェブページ、二〇一一年二月二五日一時〇二分発信記事「渡り廊下設置を中止 舞鶴市「景観損なう声に配慮」」 <http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20110225000062> (二〇一一年五月一日閲覧)。
- (28) 前掲12、馬場・村田論文、五六頁。
- (29) 前掲12、馬場論文、一八二頁。
- (30) 前掲12、馬場・村田論文、四九頁。
- (31) 前掲12、馬場・村田論文、五八頁。
- (32) 前掲12、馬場・村田論文、四九頁。
- (33) 前掲12、馬場・村田論文、四九頁。
- (34) 前掲12、馬場・村田論文、二七頁。
- (35) これは海軍のみならず戦争や近代の歴史評価に関する個人的見解や立場も影響することもあるが、それと同時に、現在も海上自衛隊の母港となっていることから、海軍イメージの形成の一部が、現在の見解や立場に関わる問題として立ち現れるからでもある。
- (36) 前掲12、馬場論文、一八一頁。
- (37) 前掲3、山本論文。
- (38) Pratt, Mary Louise (1992), *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
- (39) プレンダ・S・A・ヨウ「植民地化される側の歴史地理」(ブライアン・グレアム、キャサリン・ナッシュ編『モダン時代の歴史地理』上巻、古今書院、二〇〇五)、一七五―一九九頁。
- (40) 田中雅一・船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学1 問題系』晃洋書房、二〇一〇。田中雅一・稲葉稜編『コンタクト・ゾーンの人文学2 物質文化』晃洋書房、二〇一〇。
- (41) 拙稿「記憶のコンタクト・ゾーン——沖繩戦の「慰霊空間の中心」整備をめぐる地域の動向——」(『洛北史学』一一、二〇〇九)、四七―七二頁。
- (うえずぎ かずひろ (二〇一一年九月二十八日受理)  
文学部歴史学科准教授)